

ウェイクアップコール

「世界秩序は破綻して、美しい物語が終わる、熾烈な現実が始まった」「これまでの秩序は戻ってこない」(1月20日、ダボス世界経済フォーラムでのカーニー・カナダ首相の講演から)

「マンガやアニメはもうちゃん好きです。でも私は日本の伝統文化、特に建築を深く勉強して、日本の洗練された文化がどのように形成されてきたかを研究したいんです」(昨年12月3日、オランダ・ライデン大学で行った講義の際の女子学生の質問)

カーニー氏の警告は人類文明の振りが、再び理想主義から現実主義に振れ始めたことを簡潔明瞭に述べている。戦後の繁栄を担い、政治学者のフランシス・フクヤマ氏をして「歴史は終わった」と言わせたリベラルデモクラシー(自由民主主義)はあつという間

に賞味期限が切れたのだ。人間は理性の力と科学の急速な進歩で文明を築いてきた。しかし人を動かすのは感情であり文化だ。理性がつくった高邁な理念は

「日本」とは何かを問う時がきた

頭で分かっても、生身の人間が簡単に実行し切れるものではない。理念を守らせるための制度は効果はあるが、限度を超えると、格差を上げ、ついていけない大衆に不満が生じる。不満は制度から私利をむさぼるエリート層への反発となつて、社会は分断する。

また人のこころの奥には天使と悪魔が住んでいる。強者は理想とされる信条が自分の利益だと感じるときは天使の仮面をかぶつて美しい物語を語り、自分の利益にとつてマイナスになると一転悪魔が現れて醜い現実利益に走る。そして国際社会を相手にするときには「主権」をかざしてその主張を押し通す。戦後目覚ましい成果を挙げたリベラリズムへの信頼の滴落はこうして起こつた。

タイタニック船の上での争い そのような中で専制大国がタイタニック号の甲板で、リベラルデ

正論



元文化庁長官 近藤 誠一

モクラシーの看板を外して、晩餐会のための席の取り合いを始め。他の国々はどうしたらよいか。世界全体が大国の数に分割されるのを座視するのか。日本は「日米安保」という大黒柱に頼り

そのコストを払い続けるのか。高坂正義は「権力政治とはある程度

ながら生きてきた。白村江の敗戦も、黒船来航も、第二次大戦の敗戦も、律令制の導入、近代化、高度経済成長という国造りにつなげた。そこに共通なのは中国、西

欧、米国からの学習と追隨で国際関係に「対応」してきたということだ。しかしいまは大国のヘゲモニー争いの真つたた中で、自分の立ち位置を定めかねている。周りを見回してもモデルはない。

オランダに学ぶ

理念を頂点とするピラミッドの体制で構築されるのではなく、いくつもの主体が併存する多重構造のものに向かつているように思える。かつて語られた「新しい中世」の概念のように。カーニー氏の言う中堅諸国の連帯もそれと軌を二にするのかも知れない。

しかし歴史を振り返れば、参考になる例はある。そのひとつが、大国に囲まれながら生き延びたオランダである(高坂前掲書)。明治維新直後に欧米を視察した岩倉具視使節団は、1873年に欧州の小国を訪れた。大国のせめぎ合いの中で生き延びた国々に学ぶことが目的であった。オランダを訪

この国は盛衰を経て、どのようにして現代つ子の女子学生に遠い日本の伝統文化への憧れをもたせ、筆者をほっとさせる程の歴史を見る目を養わせたのだろうか。日本は少子高齢化、膨らむ財政赤字など多くの懸案を「先延ばし」にしてきた。しかし「日本」の守るべき価値は何かという問いこそいまや「先延ばし」できない最大の課題ではないのか。多極化した先の見えぬ世界運営に参加していく過程で、東西の思想を併せ持つ日本の力を発揮する絶好機がきたのだ。狭い国粹主義に走ることもなく、世界を長期的にリードする「日本」の旗は何なのかにつぎ国民的議論をすべきであろう。しかし与野党の論戦でこうした「国家100年の計」は見当たらぬ。まだ遅すぎることはない。フランスのリヨテという将軍が、庭に樞の木の大木を立てるには100年かかるというとき、「それならすぐ今日の午後には苗を植えてくれ」と言ったというエピソードを改めて、2期目を迎えられた高市早苗首相にお伝えしたい。

(こんどう) せいいち